

「ゼロからの資本論」に依拠して

「ゼロからの資本論」の著者斎藤幸平氏いわく、マルクスの「資本論」は、物質代謝を土台として読み進めていくと言っても過言ではありません。（物質代謝⇒生理学用語）

労働は、人間と自然との間の一過程、すなわち「人間が自然との物質代謝を自らの行為によって媒介し、規制し、制御する一過程である」と説明しています。

マルクスは、人間と自然との物質代謝を、人間の生活にとって「自然的条件」だと述べ、「どれほど技術が発展したとしても（中略）自然との物質代謝を離れて生きることができず、その限りで労働もなくなる」と説いているそうです。さらに、氏はマルクスにならって「労働」という行為を重視し、「人間の労働は何が、特殊か」の下りで、

人間だけが明確な目的を持った意識的な「労働」を介して自然との物質代謝を行っている。

と断じています。確かにその通りなのでしょう。反論の余地は見当たりません。

そして氏は、空気とダイヤモンドの違いを例えに、労働によって創りだされる「価値」と「使用価値」について説明しています。

つまり、「使用価値」の効能は、実際にそのものを使うことで実感できるが、「価値」（例へダイヤモンド）は人間の五感ではとらえることができないと断じているのです。この説明にも一応は納得できます。（特殊な工作物ではダイヤモンドの使用価値が認められている）

そこで、もし、この五感で捉えられない「価値」を無料、あるいは極めて廉価にし、それを可能な限り「使用価値」の評価にまで近づけることができたならば、人間社会に計り知れない変化をもたらすに違いありません。

要するに、これを成し遂げる（価値を使用価値に近づける）ことは環境や社会的弱者に、やさしい持続可能な国際社会（SDGs）の実現に向けた「あるべき姿の体現」に他ならないともいえ、誰一人取り残すことのない社会形成（異論は承知の上）の一助となることが期待できるのではないかということなのです。

氏が言う「価値」のためにモノを作る資本主義の下では、人間がモノに振り回され、支配され続ける。それを助長する職業として、モノに「価値」を付け、高く売り、飽きさせないための各種コマーシャルやマーケティングの仕事ばかりが増えていく。と言っていますが、これについても、その通りであり、否定する余地はないのかもしれませんが。

ニューヨーク生まれの文化人類学者 デビットグレーバーも、その著書 ブルシットジョブ(くそどうでもいい仕事の理論)の中で「世の中になくてもいい仕事でぼろ儲けしている

職業」としてジャンルの異なる多くの企業を上げています。これらの企業が手練れた広告やマーケティングによって、まさにマルクスが言う「予測不能な価値の変動が創り出され、人間が振り回され続けていることは否定できない事実」と言わざるを得ないのでしょう。各界の有識者にあっても異論の余地はないようです。

氏は、神宮外苑の再開発にも触れ

こうした「再開発」という名の囲い込みは、たしかにお金を生みますが、これこそが「社会の富」が商品として現れることの現実の姿なのです。

と訴えているのです。

あえて、過激な表現を使わせてもらうならば、現に世間にはびこる「サギまがい」と言っても過言ではない極端なマーケティングによって、誰にも予測できない価値の変動が、デビットグレーバーの指摘する事業体等において、針小棒大に創り出され続けている現実に気づかない人々…、気づいていたとしても、他人事として「我関せず」を決め込む人々、そして、その恩恵に授かる人々や無関心層によって止まるところを知らず混迷を深める昨今です。

その結果、「混沌とした人間社会（新自由主義下の資本主義）が構築されてしまった」であろうことに警鐘を鳴らし続ける斎藤幸平氏の提言に、どのように応えるべきか？

神奈川高度情報通信推進協会は、気候変動対策をはじめ、社会的弱者に寄り添う姿勢を明確に示しながら、一人でも、一組・一社でも多くの賛同者を募っているところだ。

当社団としては、「ゼロからの資本論」に対して肯定も否定もするつもりはありません。つまり、人間社会には、偏見や差別や格差が「拭い去ることの困難な個々人のエゴ」として少なからず存在していることを、誰もが認識しているはずなのです。

誤解を恐れずに言わせてもらうならば、斎藤氏の提言の背景としては、これまでの行き過ぎた新自由主義下での経済対策によって多くの弱者が切り捨てられ、取り残されてしまったという現実があるのだらうと思います。

そうした諸々を踏まえて2014年の国連総会で決議された「SDGs」は、一面において、「誰一人取り残さない社会の実現」を目指すための最大公約数的な決議であったともいえるのではないのでしょうか。

以上